

未来への伝承

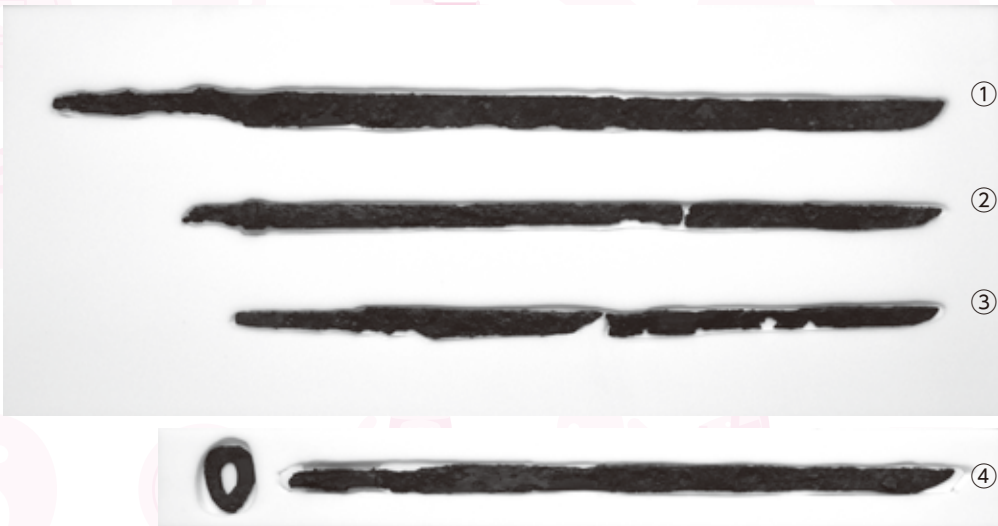
よみがえった古墳時代の刀

東台古墳群から出土した鉄製の大刀について、保存処理・修復を行いました。上高津貝塚ふるさと歴史の広場は、資料の保存管理・公開を担っており、遺跡から出土した資料については資料の種類や状態によって、適切な保存管理をする必要があります。特に鉄製品などについては、発掘調査で出土した段階で腐食が進み、非常に状態が悪いものが多く、そのままの状態では酸素や湿気の影響でさらに腐食し崩壊してしまうおそれがあります。そのため長期的な保存管理をするために、随時保存処理を行い、展示公開を目指しています。

鉄製品の保存処理では、錆などを除去するクリーニング、腐食原因となる塩素などの洗浄を行う脱塩処理、アクリル樹脂などを浸透させ補強する合成樹脂含浸、接着剤による接合、欠損部の復元・成形、復元部分を彩色する補彩などが行われます。このような処理を経て復元され、状態の安定した資料に生まれ変わります。処理後は、合成樹脂の薄い膜で覆われた状態になり、表面はやや黒味がかかり、光沢が見られます。

今回数年度に渡って保存処理を行った資料は、東台古墳群6号墳出土の大刀3振りと13号墳出土の大刀1振りです。

東台古墳群は土浦市木田余東台にあり、木田余台遺跡群の一つです。霞ヶ浦北岸の台地上に立地する、6世紀末～7世紀(古墳時代終末期)の古墳群です。古墳の墳丘は削平されていましたが、計19基の古墳(方墳・円墳・前方後円墳)が確認されています。



▲東台古墳群出土鉄製大刀(①-③:6号墳、④:13号墳)

古墳の遺体を納めた部分は、筑波山周辺の片岩を組み合わせ造られた箱式石棺です。石棺の中からは、遺体とともに納められた大刀や刀子、鍔などの鉄製の武器類、土製勾玉や管玉、土製丸玉、耳環などの装飾品、土器類が見つかっており、権威の象徴であった品々が納められました。

弥生時代から奈良時代頃までの大半の刀は、いわゆる日本刀とは違い、まっすぐに作られた直刀です。古墳時代には背から刃にかけて薄く、身の断面が細長い二等辺三角形をなす平造りと呼ばれる形が一般的で、保存処理した4点の大刀も平造りです。柄や鞘は木材が使われ、鞘は刀の形に合わせて割り貫いた木材を二枚合わせ、外面に布や革をはり、漆を塗って固めたものが一般的で、今回の資料にも木質が一部残っています。

①は全長約96センチで、柄と刀を固定する目釘穴が認められます。②は現存長81センチで、鐔の部分に付けられた縁金具が残っています。③は全長75センチで、目釘穴が2か所認められます。④は現存長61センチで、縁金具と鐔が残っており、鐔も鉄製で倒卵形をしています。

ご紹介した東台古墳群6号墳出土の大刀は、夏休みファミリーミュージアム「テーマ展」どきどきつちうら場所―遺跡出土品番付―にて初めて展示します。ぜひご覧ください。

関上高津貝塚 ☎0826・7111